

調査概要
および
対象者の要約

調査概要

1. 調査内容

- 1) 入所（園）情報の収集方法や入所前に必要であった情報。
- 2) 園生活に慣れるために役立ったこと、通園させてよかったことや園生活での気がかり、先生とのコミュニケーションの状況。
- 3) 子どもの日本語能力の程度や友達との交流。保護者の社交外交性。
- 4) 子どもが病気のとときに看護する人。
- 5) 育児の気がかりや子育て環境、育児観、育児情報源など。
- 6) 基本的属性（年齢、国籍、滞在期間、就労状況、家族構成等）。
- 7) 日本での子育てに関する自由記述。

2. 調査時期

2000年2月～9月。

3. 調査対象者

おもに園児の両親またはどちらかが外国籍の保護者、日本語を母語としない保護者。

4. 調査地域

東京都、大阪府を中心に、埼玉県、千葉県、神奈川県、栃木県、山梨県、京都府、兵庫県、奈良県、和歌山県で行った。

5. 調査方法と標本数

方法：保育所、幼稚園や協力団体を通しての任意郵送法および留置法。
有効集計数：2002 通

6. 調査票の使用言語

中国語、韓国・朝鮮語、タガログ語、ポルトガル語、英語、スペイン語、ベトナム語、タイ語、カンボジア語、ラオス語、ふりがなつき日本語、日本語の11カ国語、12種類の調査票を用いた。

7. 国籍・地域の表記について

本報告書では、集計および分析に集計数の上位11カ国の国籍・地域別を用いているが、その表記は保護者が調査用紙に記入した名称を用いた。具体的には、「日本」、「中国」、「台湾」、「韓国」、「朝鮮」、「タイ」、「フィリピン」、「ベトナム」、「ブラジル」、「ペルー」、「アメリカ」とする。

「多文化子育て」について

「多文化子育て」とは

この報告書では、「多文化子育て」を文化的・言語的背景の異なる保護者達の子育てとしてとらえた。「多文化子育て」の対象には、家族で日本に滞在する外国籍の保護者、日本人と結婚して日本で子育てをしている外国籍の人、また外国籍の人と結婚して子育てをしている日本人、日本に居住歴を持ち、日本国籍を取得した人も含める。

外国人登録者数の増加、国際結婚の増加、永住外国人の世代交代などにより、一つの家族に複数の国籍が存在することもまれではなく、日本人か外国人かという区別ではとらえきれない面も出てきた。このような実態に即し、本調査では、通園施設に通う子どもの両親のどちらかが外国籍、あるいは日本語を母語としない保護者、日本国籍を取得した人を含める。

外国人登録者数と国籍別割合

外国籍の人の日本での居住は、在留資格としては永住者と非永住者に分かれ、非永住者には定住者、日本人の配偶者、家族滞在、就学などの在留資格を持つ人がいる。

出入国管理法の改定などの影響を受けて、1980年代以降、外国人登録者数が急増し、現在約150万人の外国籍の人が日本に居住している。その構成は、それ以前は韓国・朝鮮籍の人が約9割と大半を占めていたが、1980年代以降は、登録者数の割合に変化が生じ、1999年の統計では、韓国・朝鮮籍が40.9%、中国籍が18.9%、ブラジル国籍が14.4%、フィリピン国籍が7.4%、米国籍が2.8%、ペルー国籍が2.7%、その他12.9%となった。

外国人登録に数えられない子ども達

外国籍の人の子どもが日本で出生した場合、日本の国籍法は血統主義を原則としているため、両親ともに外国籍ならば、その子どもは

両親の国籍の保持者となる。また、両親のいずれかが日本国籍の子どもは、父母両系主義の国籍法に基づき（1985年改正）、日本国籍を取得することができる。国際結婚が急増する中、日本人と外国人の間に生まれた子どもは、ほとんどが日本国籍を有し、二重国籍の場合は、外国人登録者には計数されない。そのため、統計上は外国人ではないが、「多文化」な背景を持つ子どもが今後も増えていくことが予想される。

「在日外国人の子育て」から「多文化子育て」へ

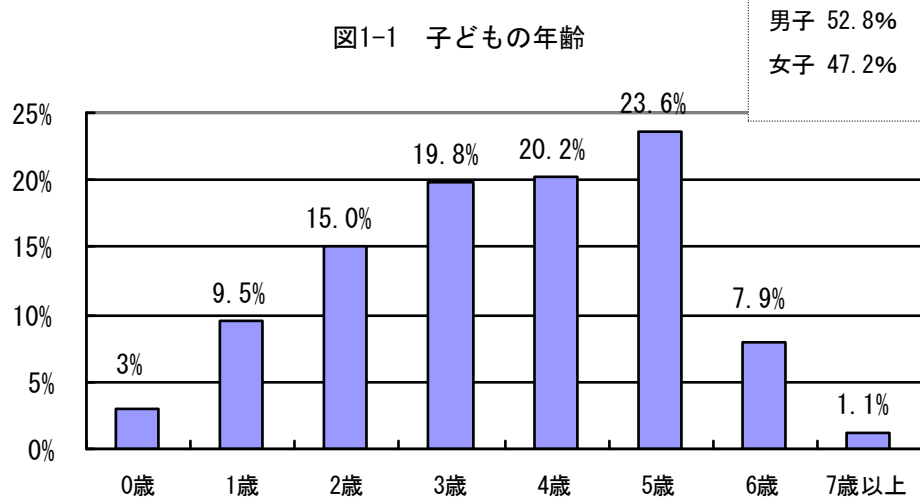
「多文化」という概念は、いまだ明確に定義されていないが、文化的・言語的背景が異なることから生じる違い、性差、世代、民族、宗教やイデオロギーの違いまでも含め、互いに認め合い、差別、偏見などをなくし、文化的な多様性を包括していこうという姿勢に基づいている。

4世や5世までもが生まれている永住外国人の日本人と変わらない生活実態や国際結婚の増加などは、「在日外国人」を様変わりさせている。しかし一方で、このように様変わりした「在日外国人」や家族で日本に滞在している外国籍の人達が、複数の文化や言語を基盤とした子育てをしなくてはならないという現実には、「多様な背景を持つ日本人」と「多様な背景を持つ外国人」を「多文化」というフィールドで包み込んでいく必要を生じさせている。

本調査に協力してくれた家庭で行われている子育てや、子どもが通う園での保育は、社会全体の動きに先駆けて、多くの課題を抱えながらも「多文化」が既実践されている。このことは、調査結果からも明らかにされた。このようなことから、本報告書のタイトルを、従来の「在日外国人の保育・教育」の枠を超えた、より明確に現実の姿を表現できる「多文化子育て」とした。

調査対象者の属性（概要）

図1-1 子どもの年齢



回答者の国籍は、合計で65カ国であった。上位にあげられる父母の国籍は、下の表の通りである。

回答者の続柄は、母親が83.2%、父親が16%、その他の親族が0.8%であった。

表1-1

母親の国籍	%
中国	34.6
韓国・朝鮮	19.1
日本	16.7
フィリピン	12.4
ブラジル	3.8
タイ	3.0
ペルー	2.1
ベトナム	2.0
その他	6.3

(上位8カ国)

表1-2

父親の国籍	%
中国	26.1
韓国・朝鮮	17.3
日本	8.8
アメリカ	7.8
ナイジェリア	3.6
フィリピン	2.6
ベトナム	2.6
バングラデシュ	2.3
パキスタン	2.3
その他	26.6

(上位9カ国)

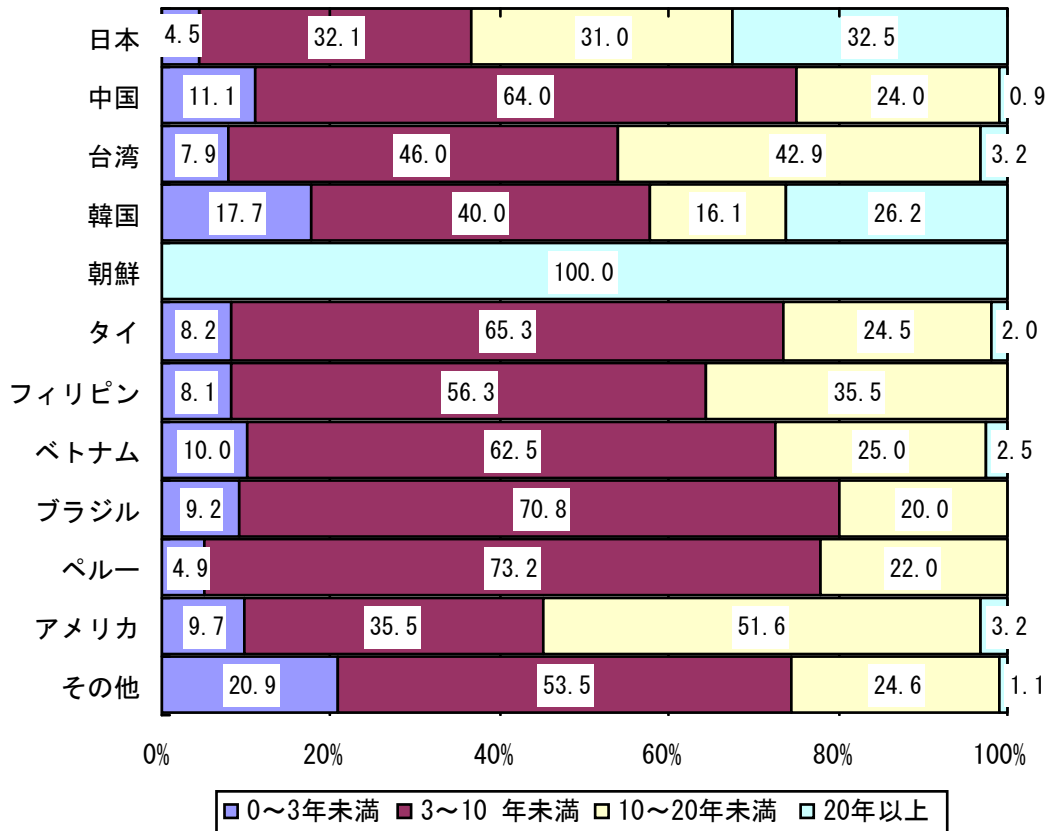
表1-3 両親の国籍・地域（上位11カ国とその他）

		父親の国籍・地域											計	
		日本	中国	台湾	韓国	朝鮮	タイ	フィリピン	ベトナム	ブラジル	ペルー	アメリカ		その他
母親の国籍・地域	日本	113	66	2	36	1	1	8	1	6	4	39	119	396
		6.4%	3.8%	0.1%	2.0%	0.1%	0.1%	0.5%	0.1%	0.3%	0.2%	2.2%	6.8%	22.5%
	中国	182	325	5	2					1			3	518
		10.4%	18.5%	0.3%	0.1%					0.1%			0.2%	29.5%
	台湾	40	5	13	1					1				60
		2.3%	0.3%	0.7%	0.1%					0.1%				3.4%
	韓国	64	1		204	8						3		280
		3.6%	0.1%		11.6%	0.5%						0.2%		15.9%
	朝鮮	2			4	35								41
		0.1%			0.2%	2.0%								2.3%
	タイ	42			1								1	44
		2.4%			0.1%								0.1%	2.5%
	フィリピン	162			3			13		1			1	180
		9.2%			0.2%			0.7%		0.1%			0.1%	10.2%
	ベトナム	1							37					38
		0.1%							2.1%					2.2%
ブラジル	14							1	44	4		1	64	
	0.8%							0.1%	2.5%	0.2%		0.1%	3.6%	
ペルー	8								1	25		1	35	
	0.5%								0.1%	1.4%		0.1%	2.0%	
アメリカ	6										1		7	
	0.3%										0.1%		0.4%	
その他	29	3	4							1	1	56	94	
	1.7%	0.2%	0.2%							0.1%	0.1%	3.2%	5.4%	
合計	634	397	20	251	44	1	21	39	54	33	43	126	1757	
	36.1%	22.6%	1.1%	14.3%	2.5%	0.1%	1.2%	2.2%	3.1%	1.9%	2.4%	7.2%	100.0%	
														上段：人数
														下段：%

☆ 最も割合が多い組み合わせは、父母とも中国で、全体の18.5%であった。
次に多い順は、父母とも韓国で全体の11.6%、母親が中国、父親が日本で10.4%、
母親がフィリピン、父親が日本で9.2%と続く。

★この表は、父母ともに国籍の記入があった組み合わせのみを集計している。

図1-2 回答者の滞在年数



全体としては

平均滞在年数：

7.3年

(日本生まれを除く。SD3.83年)

今後の滞在予定：

これから一生

→39.8%

これから数年 (平均4.6年)

→10.8%

未定

→49.4%

在日の理由

仕事→27.5%

留学・勉強→5.9%

結婚した→32.2%

家族の世話→13.3%

生まれた国→11.1%

残留孤児の子孫→2.9%

その他→7.1%

表1-4 家庭で使う言語数

	1カ国語	2カ国語以上
0～3年未満	89.6%	10.4%
3～10年未満	81.8%	18.2%
10～20年未満	77.6%	22.4%
20年以上	88.9%	11.1%
計	82.4%	17.6%

☆ 本報告書の調査対象者が家庭で使う言語の数を滞在年数の推移で見ると、1言語の割合は、89.6%、81.8%、77.6%、88.9%となっており、大きくは変化していない。

☆ 家庭で日本語を使っているかどうかは、滞在年数の推移では、17.1%、48.9%、66.1%、91.7%と増加が著しい。家庭で1カ国語を使用している場合には、滞在年数が短ければ母語を使っている可能性が高い。長期に及んでいる場合には、日本語だけで生活をしている割合が滞在10年以上で5割を超え、20年以上で8割を超えている。

表1-5 家庭での日本語使用（滞在年数別）

0～3年未満	日本語を使わない	82.9%
	日本語を使う	17.1%
3～10年未満	日本語を使わない	51.1%
	日本語を使う	48.9%
10～20年未満	日本語を使わない	33.9%
	日本語を使う	66.1%
20年以上	日本語を使わない	8.3%
	日本語を使う	91.7%
計	日本語を使わない	46.3%
	日本語を使う	53.7%

図1-3 回答者の日本語能力

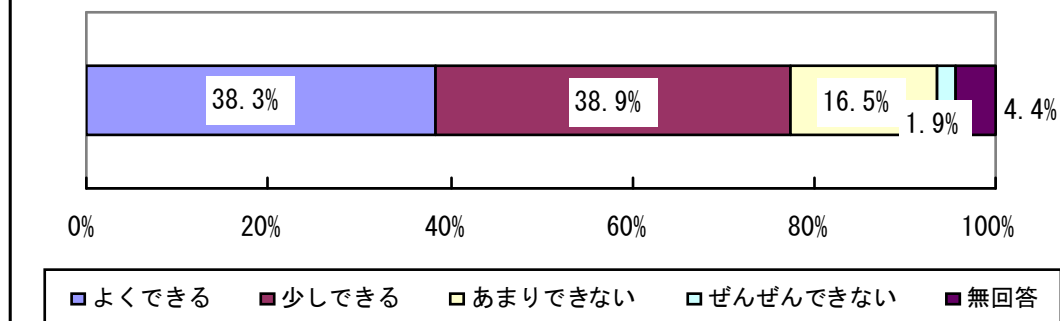


表1-6 家庭での日本語の使用状況（国籍別）

		回答者の国籍・地域												
		日本	中国	台湾	韓国	朝鮮	タイ	フィリピン	ベトナム	ブラジル	ペルー	アメリカ	その他	
配偶者の国籍・地域	日本	使わない	32.2%	28.7%	17.5%	14.8%	0.0%	9.1%	10.3%	0.0%	14.3%	25.0%	48.1%	18.5%
		使う	67.8%	71.3%	82.5%	85.2%	100.0%	90.9%	89.7%	100.0%	85.7%	75.0%	51.9%	81.5%
	中国	使わない	50.0%	78.2%	25.0%	100.0%								66.7%
		使う	50.0%	21.8%	75.0%	0.0%								33.3%
	台湾	使わない	0.0%	16.7%	61.5%									100.0%
		使う	100.0%	83.3%	38.5%									0.0%
	韓国	使わない	0.0%	50.0%	0.0%	61.8%	0.0%	0.0%	0.0%				0.0%	
		使う	100.0%	50.0%	100.0%	38.2%	100.0%	100.0%	100.0%				100.0%	
	朝鮮	使わない	0.0%			11.1%	5.7%							
		使う	100.0%			88.9%	94.3%							
	フィリピン	使わない	33.3%						84.6%					
		使う	66.7%						15.4%					
	ベトナム	使わない	0.0%							94.7%	100.0%			
		使う	100.0%							5.3%	0.0%			
	ブラジル	使わない	33.3%	0.0%	0.0%				0.0%		77.3%	100.0%		
		使う	66.7%	100.0%	100.0%				100.0%		22.7%	0.0%		
	ペルー	使わない	25.0%								25.0%	92.3%		100.0%
		使う	75.0%								75.0%	7.7%		0.0%
アメリカ	使わない	16.7%										100.0%	0.0%	
	使う	83.3%			100.0%							0.0%	100.0%	
その他	使わない	18.9%	33.3%				100.0%	0.0%		100.0%	100.0%	100.0%	87.7%	
	使う	81.1%	66.7%				0.0%	100.0%		0.0%	0.0%	0.0%	12.3%	

- ☆ 同じ国籍の夫婦の家庭では、日本語を使う割合が多いほうから、朝鮮 94.3%、日本 67.8%、台湾 38.5%、韓国 38.2%、中国 21.8%となっている。
- ☆ 全体として、両親が同じ国籍の家庭より、両親が異なる国籍（いずれかが日本国籍でもそうでない場合でも）の家庭の方が日本語を使う割合が高い。